

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00986

研究課題名(和文) 壬辰戦争期、明朝から日本に贈られた箭付・冠服類の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive research on the garments and crowns given to Japan from the Ming dynasty during the Imjin War

研究代表者

新宮 学 (ARAMIYA, Manabu)

山形大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：30162481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： 壬辰戦争期に明朝から上杉景勝に贈られた冠服と箭付(上杉神社所蔵)は、2018年に国の重要文化財として分割指定された。研究代表者の新宮学は、この景勝冠服と京都妙法院所蔵の秀吉冠服は、陪臣と国王との違いはあるとはいえ、相互に補完し合う関係にあることを明らかにした。今回の指定では、明服の胸背部分に縫い付けられた、官位を示すゼッケン状の補子の文様は、斗牛文とされた。これに対し、分担研究者の佐藤琴は、図像学的研究の視点から分析し、8世紀中国で登場した「紺丹緑紫」と呼ばれる配色法で、1対の翼翅が描かれていることから飛魚文と結論付け、再考の余地があることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の重要文化財指定では、上杉景勝に贈られた明朝冠服も日本服飾史の延長上で説明されてきた。2018年の分割指定の名称変更では、中国服飾史上に位置づけた点で大きく改善された。本研究では、近年進展目覚ましい中国の明朝服飾研究の成果を踏まえることの重要性を一層明らかにした。そもそも、これらの冠服類は、壬辰戦争(1592～98年、文禄・慶長の役)で日・明間の講和交渉にあたり、日本国王冊封のアイテムとして用いられたものである。当時、明朝を中心とした冊封体制は変質を迫られていたとはいえ、これらの冠服や箭付は、今後東アジア地域共有の文化財として認識したうえで、研究する必要があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The garments and crowns (owned by Uesugi Shrine), which was given to Uesugi Kagekatsu from the Ming Dynasty during the Imjin War, was designated as a national important cultural property in 2018. Principal investigator Manabu ARAMIYA clarified that this Kagekatsu's garments and crown and Hideyoshi's, which is owned by Kyoto Myohoin, complement each other, although there are differences between the vassal and the king.

In this designation, the mandarin square pattern(Buzi) sewn on the chest and the back of the garment is the big Dipper and Altair (Douniu) pattern. On the other hand, Koto SATO, a researcher in charge, analyzed from the viewpoint of iconographic research, and a pair of wings was drawn by the color scheme called "Kontan Ryokushi" that appeared in China in the 8th century. She concluded that it was a flying fish(Feiyu) pattern and pointed out that there was room for reconsideration.

研究分野：東洋史

キーワード：壬辰戦争 明朝 上杉景勝 冠服 補子 飛魚文 犀角帯 烏紗帽

## 1. 研究開始当初の背景

米沢市上杉神社には、中国明朝時代の官僚が着用する冠服類 1 セットがほぼ完全な形で保存されている。内訳は、a. 常服(盤領緋袍)一件、b. 便服一件、c. 烏紗帽一頂、d. 犀角帯一条、e. 靴一双からなる。これに「都督同知」の官職授与を兵部尚書石星が通達した f. 箭付一張(下行文)が付随している。

これらの冠服類は、豊臣秀吉が朝鮮に出兵した「壬辰戦争」(The Imjin War) いわゆる文禄の役と慶長の役の間に進められた講和交渉の過程で、1596 年に明朝皇帝が秀吉を「日本国王」に封じるにあたり、秀吉のみならず配下の諸将たちにも官職と冠服が贈られたものの一部である。上杉神社には上杉景勝への官職授与を通達する兵部の箭付も併せて保存されており、秀吉の配下となった景勝に贈られたものであることが判明する。

上杉神社に残る上杉謙信や景勝の服飾類が室町・桃山時代の衣裳として貴重な価値があることはよく知られているところで、1961 年に国の重要文化財に指定された(山辺知行・神谷栄子『上杉家伝来衣裳』講談社、1969)。当時の指定は、日本服飾史の専門家の調査をへて「服飾類(伝上杉謙信・上杉景勝所用)」として一括指定されたものである。しかし、明朝の冠服類や公文書資料としての兵部の箭付について個別に精密な調査が行われたわけではなかった。箭付については、その後大庭脩氏が秀吉を日本国王に封じるにあたって与えた誥命と関連して景勝らにも贈られた箭付や冠服類についても紹介した貴重な先駆的研究(1971)があるものの、明朝史を専門とする立場から見ると、その研究にはまだ不十分な点が残されていると言わざるを得ない。

1990 年代末には京都国立博物館の河上繁樹(1998)が妙法院所蔵の秀吉冠服を調査し、景勝冠服の保存状態の良さとその価値を再評価した。これに触発されて研究代表者新宮(2000)もその貴重な価値と山辺・神谷の研究以来「龍紋」とされてきた補子の文様について検討を加えてその説を否定した。近年では、日本史の対外関係研究の関心から米谷均(2014)や須田牧子(2017)が、秀吉を日本国王に封じるにあたり陪臣として諸将 40 名に官職が授与されたとして研究を再開した。とくに須田の研究は、景勝らに与えられた箭付内の官職名が書き替えられた事実に着目した文書学的研究で、古文書研究の精緻な料紙調査に基づいている。箭付内の官職名が二段階で改変されたという新たな仮説を提起した点が注目される。

## 2. 研究の目的

壬辰戦争における一時休戦期の 1596 年、明朝が豊臣秀吉を日本国王に冊封するにあたって陪臣の上杉景勝にも贈った冠服類と箭付(米沢市上杉神社所蔵)は、近世東アジア地域の相互交流を示す貴重な資料である。これらを中国の服飾史や公文書研究の視点から再調査・研究して、日本にとどまらず中国はもちろん東アジア地域全体から見ても極めて稀少なものであり、その重要な学術的価値を有することを明らかにする。併せて秀吉の他の諸将にも同時期に 50 セット余りが贈られたとされる明朝冠服の残存状況について調査する。さらに現在の東アジア地域(中国・韓国・台湾など)からインバウンド旅行者の増加を視野に入れて、地方都市に残された貴重な文化財を東アジア地域で再評価できる文化資源として新たに活用するための方法についても提案する。

## 3. 研究の方法

### (1) アジア史の文献史料と文物資料を扱う研究者が共同して調査研究する

アジア史の研究領域では、これまで大学の研究者と博物館に勤務する研究者との共同研究が十分行われてこなかった。双方の研究者がそれぞれの専門的知識をもとに協力して調査することで、その成果を融合して箭付と冠服を広く一般の人々にも東アジア交流史の具体相を理解できる文化資源として再定位することが期待できる。

### (2) 中国服飾史の中にあらためて景勝の明朝冠服の価値を定位する

服飾史研究は、日本では長い伝統があるものの、重要文化財の指定にあたり、日本の服飾史で用いられた名称で分類紹介しただけでは、その本来の価値を明らかにすることはできない。中国服飾史上の名称に正しく分類することが不可欠であり、こうしてこそ中国やその他東アジア地域に残された明朝冠服類と比較考察することが可能となる。その際、この 10 数年来、中国で発表され始めた服飾史研究の成果(たとえば、董進『大明衣冠図志』北京大学出版社、2011 年など)は大いに参考になる。伝世品としてよく保存された景勝冠服の研究成果は、中国の学界ではまだほとんど知られておらず明代服飾研究への新たな寄与が期待できる。

### (3) 明朝の公文書研究や官僚制度史の視点から箭付を調査分析する

大庭脩氏の研究は歴史研究として先駆的なものの、中国古代中世の専門家によるもので不十分な点はまだ残されている。本研究では、明朝史の専門研究者を揃えて公文書の分析をより深めるとともに、日明外交史研究、さらには歴史認識の問題にも、その研究成果を取り入れることが期待できる。

#### (4) 文化財の活用方法、複製品製作や保存修復の可能性を視野に入れる

冠服と笥付の調査研究に止まらず、研究成果の地域社会への還元をも意図している。これらの文化財の価値を広く地域社会や後世に伝えてその活用方法を提案する。また精巧な複製品製作や保存修復の可能性について調査検討する。

### 4. 研究成果

- (1) 本科研は、研究代表者と分担研究者2名に連携研究者3名を加えて5名で実施した。当初3年の期間であったが、新型コロナウイルス感染拡大により、調査活動が制約されたため1年延長した(2018-2021)。2回の資料調査と4回の共同研究会(うちオンライン併用1回)を実施することができた。資料調査では、2018年に上杉神社所蔵の重要文化財の上杉景勝に贈られた明朝冠服5件のうち、a.常服(盤領緋袍)、b.便服件、d.犀角帯の3件の資料を熟覧した。2019年には、京都市の妙法院所蔵の重要文化財「明官服類(文禄五年豊臣秀吉受贈)」の熟覧調査を、寄託先の京都国立博物館において連携研究者の山川暁の指導のもとに実施し、米沢上杉神社所蔵の上杉景勝受贈の明冠服と比較研究する貴重な機会となった。共同研究会は、4年の期間中に全員が研究発表を行い、相互に検討した。公表された主な研究成果のみ、(2)にその概要をまとめる。

#### (2) 公表された研究成果

研究代表者の新宮学は、2019年度東北史学会大会(東北大学文学研究科開催)にて、「明朝の日本国王冊封上杉景勝に贈られた冠服・兵部笥」と題して公開講演を行い、この間の調査研究の成果を発表した。近年の日明交流史や海域アジア史研究の進展を踏まえて、2000年の旧稿「十六世紀末の日本と中国・朝鮮との講和交渉 米沢上杉神社所蔵の明朝冠服を手掛かりに」(『西村山地域史の研究』18号)の再検討作業を行った。景勝の冠服と勅諭の中に明朝から贈られたリスト(目録)の存在する京都妙法院所蔵の豊臣秀吉冠服とを比較検討することで、両者の冠服のうち烏紗帽や犀角帯など相互に補完しあう関係にあることを明らかにした。また壬辰戦争期に4年に及んだ和平交渉の展開に注目して、冊封主体の明朝皇帝と廷臣会議での議論を分析した。この時期に明朝が取った「許封不許貢」路線のもとに、勅諭に「原約三事」が明記され、笥付にも対応する内容が記されており、これこそが秀吉の激怒の理由であり、明朝の朝貢貿易体制の明らかな変質を露呈するものであったことを指摘した。なお、講演概要は、『歴史』134輯(2020)に掲載された。分担研究者の佐藤琴は、科研発足以来の米沢上杉神社や京都国立博物館での明服実見調査をもとに、これまでの研究成果を論文「上杉神社所蔵の明朝冠服の補子について 飛魚か斗牛か」(『山形大学歴史・地理・人類学論集』22号(2021))にまとめて公表した。2018年の上杉景勝冠服の重要文化財分割指定では、明服は「大紅刻糸胸背斗牛円領」と新たに命名された。官位を示すゼッケン状の補子の文様には「翼翅はない」とされ、斗牛文と判断された。これに対し、絵画史を専門とする佐藤の研究では、図像学的研究の視点から分析を加えて、8世紀中国で登場した「紺丹緑紫」と呼ばれる配色法で1対の翼翅が描かれていることを明らかにし、飛魚文と結論付けて再考の余地があることを明らかにした。連携研究者の大野晃嗣は、『東洋史研究』78巻2号(2019)に、論文「明朝と豊臣政権交渉の一齣 明朝兵部発給「笥付」が語るもの」を公表した。兵部笥に加えられた修正痕を手がかりに、中華帝国から得られるものを最大限に利用しようとする豊臣政権の現実主義的な姿を解明した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 新宮学	4. 巻 23
2. 論文標題 新刊紹介 上杉神社特別展示図録『明国笥付上杉景勝宛一幅 明冠服類（文禄五年上杉景勝受贈）一括』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山形大学歴史・地理・人類学論集	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 新宮学	4. 巻 -
2. 論文標題 景勝に贈られた明朝冠服、米沢で修理後初公開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山形新聞（文化欄）2021年9月18日	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新宮学	4. 巻 134
2. 論文標題 明朝の日本国王冊封と上杉景勝に贈られた冠服・兵部笥	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史（東北史学会）	6. 最初と最後の頁 97-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤琴	4. 巻 22
2. 論文標題 上杉神社所蔵の明朝冠服の補子について 飛魚か斗牛か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山形大学歴史・地理・人類学論集	6. 最初と最後の頁 43-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山川 暁	4. 巻 85 ( 3 )
2. 論文標題 ステイホームと博物館 (美術館・博物館の挑戦 京都国立博物館)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 茶道雑誌	6. 最初と最後の頁 70-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新宮 学	4. 巻 1
2. 論文標題 明中都皇城考 (中国語)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第二十届明史国際学術研討会暨朱元璋与明中都国際学術研討会論文匯編	6. 最初と最後の頁 441-456
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 新宮 学	4. 巻 16
2. 論文標題 東アジア文化圏の暦と改元	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 河北の歴史と文化 (河北郷土史研究会)	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新宮 学	4. 巻 20号
2. 論文標題 講演要旨：地域からみた壬辰戦争 米沢市の上杉神社に残る明朝冠服を中心に (韓国語)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山形大学歴史・地理・人類学論集	6. 最初と最後の頁 55-59頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大野晃嗣	4. 巻 78巻2号
2. 論文標題 明朝と豊臣政権交渉の一齣 明朝兵部発給「箭付」が語るもの	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 129-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 琴	4. 巻 26号
2. 論文標題 最上家信奉納の猿曳駒図絵馬について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史館だより (最上義光歴史館)	6. 最初と最後の頁 2 -3頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 新宮 学
2. 発表標題 明朝の日本国王冊封と上杉景勝に贈られた冠服・兵部箭
3. 学会等名 東北史学会大会公開講演 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新宮 学
2. 発表標題 明中都皇城考
3. 学会等名 第二十届明史国際學術研討会暨朱元璋与明中都国際學術研討会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新宮 学
2. 発表標題 壬辰戦争期、上杉景勝に贈られた明服補子再考
3. 学会等名 東北史学会大会 東洋史部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤 琴
2. 発表標題 浮世絵にみるパロディ 落合芳幾「今様擬源氏」の位置
3. 学会等名 日本万華鏡（ポロー ニャと山形の交流事業）ポローニャ大学博物館（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大野晃嗣
2. 発表標題 一場明朝与豊臣政権間の交渉
3. 学会等名 第七届中国古文書学国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 新宮学（賈臨宇・董科 訳、高寿仙 校）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 外文出版社（中国・北京）	5. 総ページ数 425
3. 書名 明代遷都北京研究 近世中国の首都遷移	

1. 著者名 山川暁、板倉聖哲、ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 686
3. 書名 アジア仏教美術論集 東アジア4 南宋・大理・金	

1. 著者名 山川暁ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 読売新聞社	5. 総ページ数 253
3. 書名 皇室の名宝 御即位記念特別展	

1. 著者名 渡辺健哉、オリオン・クラウタウ、ミシェル・モールほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 349
3. 書名 村上専精と日本近代仏教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 琴  (SATO Koto)  (20620941)	山形大学・学士課程基盤教育機構・准教授    (11501)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	大野 晃嗣  (ONO Aki tsugu)  (50396412)	東北大学・文学研究科・教授    (11301)	
連携研究者	山川 暁  (YAMAKAWA Aki)  (70250016)	独立行政法人国立文化財機構京博物館博物館・学芸部工芸室・室長    (84301)	
連携研究者	渡辺 健哉  (WATANABE Kenya)  (60419984)	大阪市公立大学・大学院文学研究科・教授    (24402)	2020年に追加

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関